

発表題目 将来自己の表象

信原幸弘 (Yukihiro Nobuhara)

東京大学

われわれは将来の自己をどのように表象しているのだろうか。将来の自己も自分であることに変わりがないが、現在の自己ほど大事なものとして表象してはいないのがふつうだろう。個人差はあるが、あるいは、同じ人でも時と場合によって異なるが、誰しも多かれ少なかれ将来自己を現在自己より大事でないものとしてふつう表象している。将来自己をどの程度大事なものとして表象するかは、どんな要因によって左右されるのだろうか。

まず、第一に考えられるのは、価値の時間割引である。われわれは同じ報酬でも、それが手に入るのが遅くなるほど、その価値を割り引いて見積もる。したがって、同じ楽しみや苦痛でも、現在自己のそれらのほうが将来自己のそれらより重要だと感じられる。また第二に、目標や計画を立てるとき、どれくらい先のことまで考慮に入れるかという時間枠の要因も関係してくる。アリとキリギリスの話が示すように、アリのような長期的な時間展望に立つ場合は、その長期的な時間枠の中の将来自己は大事にされるが、キリギリスのような短期的な時間展望では、その短期的な時間枠を超えた将来自己は無視される。このように将来の時間的展望のあり方が将来自己の表象のあり方に影響する。

さらに第三に、将来自己を鮮明に表象するほど、将来自己は大事に表象される。将来の自己に向けて手紙を書くなどして、表象の鮮明さを操作することで、このことが確かめられる。第四に、将来の楽観バイアスも関係するかもしれない。われわれは、たとえば自分が平均より長生きすると思うなど、将来の自分について楽観的に考える傾向があるが、このことが将来自己の大事さの表象に影響するかもしれない。

これら四つの要因は将来自己の表象において互いにどのように関係し合っているのだろうか。各要因に関わる脳部位（前頭葉の一部や帯状回の一部など）が多少なりとも解明されてきている。本発表では、そのような成果を参照しながら、四つの要因がどう関係し合うかを考察する。そのさい、将来自己の表象が他者の表象にどれくらい近いかということにも簡単に触れ、将来自己への気遣いを他者への気遣いの関係についても若干の考察を行う。